

クラシック音楽のコンサートを創ろう！ ～アートマネジメントが抱える課題に挑戦～

1 目的・概要



私たちのプロジェクトでは、プロのクラシック音楽業界への提言を最終目標とし、業界が直面する課題について議論するのみならず、実際にコンサートを企画・運営することで、より実践的な課題解決策を模索した。

科目担当者や業界の第一線で活躍するゲストから学ぶとともに、音楽マネジメントの研究者や演奏家など幅広く音楽業界に関わる人材から「クラシック音楽を取り囲む環境」を知る機会を得た。

本プロジェクトの最終成果として作成する「提言書」には、春と秋に各一回ずつ実施したコンサート企画の経緯と実施報告、及びコンサートの成果を踏まえての提言を記している。学生であるからこそ、プロのクラシック音楽業界にとって一つの新しい視点を与えるような提言ができるよう努めた。



Annual Schedule

2018年	4月	クラスの役割分担、クラシック音楽業界の課題認識、コンサートドリームプランの発表
	5月	ゲストスピーカーによる講義、企画コンペ、フィールドワーク
	6月	コンサート準備、ゲストスピーカーによる講義
	7月	コンサート実施、アンケート集計、ポスター作成
	10月	クラスの役割分担、クラシック音楽業界の課題認識、春学期の反省
	11月	ゲストスピーカーによる講義、企画コンペ、コンサート準備
	12月	コンサート準備、フィールドワーク、コンサート実施
2019年	1月	成果報告会、提言書発行（予定）



2 成果達成度

春学期コンサート：「ニコ動風?!クラシック実況中継!」

コンサート概要

①ニコニコ動画風に観客のリアルタイムコメントを投影

演奏中に観客の感想や意見を共有できれば、他ジャンルの音楽ライブのような盛り上がりや気軽さを演出できるのではないかと考え、ニコニコ動画風に演奏者の映像前面を来場者の投稿したコメントが流れていくという演出を行った。

②運営側による解説コメントを投影

クラシックの知識があまりない人でも「楽しく聴くことができるようになる」きっかけとなるような解説のコメントを作成し、演奏者の背後に投影した。

コンサートの目標

- ①クラシック音楽の親しみにくさを克服するきっかけを作ること
- ②大学生でも気軽にコンサートに行けるようになってもらうこと

コンサートの成果

来場者対象に行ったアンケートの結果、ニコ動風コメントに対しても解説コメントに対しても好意的な意見が大多数であった。同志社礼拝堂という会場の選択は、クラシックならではの荘厳さを保ちつつ新しい試みを導入するのに適切な選択であったとの評価を得た。業界関係者に強い興味を示していただけたり、出演者の方にも楽しんでいただけたことは意外な成果であった。



秋学期コンサート：「ニコ動風クラシック実況中継～弦楽四重奏～」

コンサート概要

(1) ニコニコ動画風に観客のリアルタイムコメントを投影

演奏を聴きながら2つのスクリーンを同時に視聴し、かつ観客がコメントを打ち込むということが難しいと判断し、運営側の解説を投影するためのスクリーンをなくした。

(2) コンサートの裏側を見せる演出

私たちプロジェクトメンバーがコンサートを運営する様子や演奏者の方との打ち合わせの様子などを収めたプレムービーを本番の演奏開始前に投影した。加えて、Twitterを用いた広報の一環としてもコンサート創りの裏側を見せるようなツイートを投稿した。

コンサートの目標

大学生がクラシック音楽に親しむきっかけとなるようなコンサートを創ること

コンサートの成果

秋学期は解説の投影をなくし、春学期のコンサートをブラッシュアップした。来場者の意見の中にはニコ動風コメントの投影が不要という意見など否定的なものもあり、プロのコンサートに導入する時に考慮すべき課題が明らかになった。春学期と同じく演奏者からの評価は高く、自分のコンサートにもニコ動風の演出を取り入れたいとお墨付きをいただいた。



3 プロジェクトを通じて

私たちが実施した「ニコ動風」のコンサートは、非常にチャレンジングな試みであった。通常厳粛な雰囲気の中で進行されるクラシック音楽のコンサートに、画面上でのコミュニケーションを取り入れることが果たしてどのような効果を生み出すのか、当初私たちメンバー自身も期待と不安半分々々といった心持であった。既存のコンサートでも、画面上で一方通行の解説がなされたり、出演者のトークがあったりというコンサートはある。しかし、コンサート会場にいる不特定多数の人が「画面上で」しかも「リアルタイムで」コミュニケーションをとるということは、クラシック特有の厳粛な雰囲気を壊したり、音楽そのものに耳を傾けることを阻害したりする懸念からか、未だに実現していなかった。



「ニコ動風」そのものが画期的であったことに加え、秋学期は広報手段でも新しい試みに挑戦した。SNSに馴染みのある大学生に向けての広報であれば、紙媒体は必ずしも必要ないのではないかとの仮説を検証すべく、広報開始からの一定期間、チラシやポスターなどの紙媒体を一切用いずにSNSのみでの広報を行った。この広報手段は結局頓挫し、最終的（本番の数日前）に紙媒体の印刷も行った。この広報にまつわる一連の混乱は、悪く言えば学生ならではの段取りの悪さであったが、善く言えば学生ならではの柔軟さであったとも言える。

このように、本プロジェクトでは、プロの方が「挑戦してみたいけれど二の足を踏んでいる」というような試みに挑戦できたと考えている。春・秋ともにコンサートの来場者を対象に行ったアンケートでは、賛否両論、興味深い御意見をたくさんいただいた。演奏者をはじめとする音楽業界に従事しておられる方々からは、私たちの取り組みに強い興味をお示しいただき、「ぜひ自分たちのコンサートに導入してみたい」とのお声をいただいた。私たちのコンサートに来場してくださった方々や業界の方々の貴重なご意見を踏まえた上で、この春には私たちからプロのクラシック音楽業界に向けてプロジェクトの報告を兼ねた提言書を発行する。私たちの挑戦を知って、プロのクラシック音楽業界の方々が少しでも「面白い」と感じてくださり、プロのコンサートに応用してくださるようなことがあればこれほどうれしいことはない。



編集後記

この一年間を振り返って、本当によくやったなと思います。今年度のメンバーはクラシック音楽にどっぷり傾倒している人もいなければ、機械に詳しい人もおらず、コンサート創りに苦戦しました。春学期は特にドタバタして、コメントの投影に成功したのはなんとコンサート当日の朝でした…。実際に社会に出てしまうと、出来るかどうか分からないことに時間とお金をかけるのは難しいと思います。学生という立場を最大限に生かして、もしかしたら大失敗するかもしれないことに挑戦できたのは本当に良い機会でした。共に暗中模索してくださったメンバーのみなさま、閉室時間を過ぎてでも対応してくださった事務局のみなさま、私たちに「現場」を垣間見せてくださったプロのみなさま、私たちのプロジェクトに関わってくださった全ての方々と事物に感謝します。ありがとうございました。

プロジェクトメンバー

荒川 幸寛(経2) 梶田 健斗(法3) 新垣 皓生(社2) 玉田琳太郎(文2) 長尾 早希子(政策2) 中川 湖夏(神4)
山口 弘人(商3 SA)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

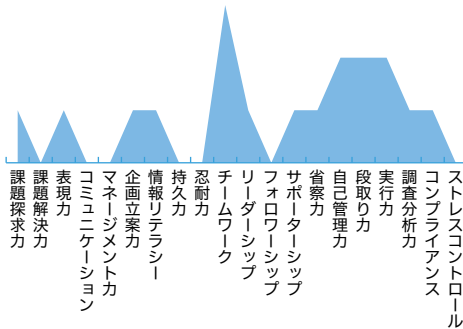
授業開始時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

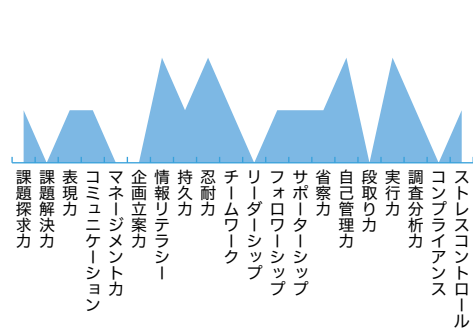


春学期終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

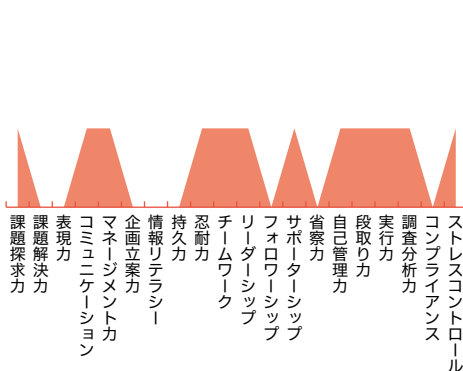


Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい



授業終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい



Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい

